

再考・想像力と倫理感

－「闇の奥」の一研究－

藤原 洋樹

倉敷芸術科学大学教養学部

(1997年9月30日 受理)

I 序 論

ジョセフ・コンラッド (Joseph Conrad) が1857年に生まれ、17歳の時に当時帝政ロシアの圧制下にあった故国ポーランドを脱出して船員になり、イギリス国籍をとって最終的には船長にまでなったという経歴自体珍しいものであるが、ポーランド語、フランス語に続いて三番目の言語として20代の始め頃に初めて聞いた英語を使って、30代の終わりになって小説の執筆に手を染め、イギリス小説の歴史においても傑出した小説群を残した作家としても、彼は類い希な存在である。そういう意味では、彼の英語に対する執着もさることながら、英語の駆使能力についての自信も相当なものと言わざるをえない。彼は生涯に、長篇小説を14篇、短篇小説を30篇残しており、いずれのカテゴリーにおいても傑作を残しているのも、渡辺淳一氏の言うておられることから判断すると¹⁾、コンラッドはもともと短篇作家であると言える。そのことは前にも私の小論で述べたことであるが²⁾、長篇『ロード・ジム』(Lord Jim-A Tale, 1900)の成立過程を考えてみれば納得できる。コンラッドの長篇の中にも又短篇の中にも、「冗長である」とか「もっと短くできるのではないか」といった批判を受けているものもあるが、このこともコンラッドが短篇作家であるということと無関係ではないと思われる。

この小論で取り上げる短篇「闇の奥」(‘Heart of Darkness’)は、『ロード・ジム』と同時期に書かれたものであり、『ブラックウッズ・マガジン』(Blackwood's Magazine)に1899年2月から4月にかけて連載され、その後1902年に『「青春」と二つの物語』(Youth: A Narrative; and Two Other Stories)という短篇集の中的一篇として出版されたものであるが、作家コンラッドの資質を理解するには最も相応しい彼の代表的短篇、と言うよりもむしろ代表的作品であると言える。彼は1890年に老朽化した汽船の船長としてアフリカのコンゴに赴き、そこでヨーロッパの白人達にこき使われている黒人達の惨状を目の当たりにして、白人達が掲げている高邁な理想とは遥かに懸け離れた、帝国政策の略奪にも等しい圧制という現実を思い知らされる。ポーランド人であるコンラッドは圧制ということには特に敏感な反応を示したに相違ないし、又自身熱病にも罹ったりして、肉体的にも精神的にも大いなる苦しみをなめたようであるが、正にこの苦しみこそが、人間としての又小説作家としてのコンラッドを大きく変え、イギリス小説の伝統の中でも正統的ではあるが特異な、コンラッドならではの作品を生み出させること

になるのである。「闇の奥」と短篇集『不安の物語』(Tales of Unrest, 1898)の中に入れられている「進歩の前哨点」(‘Outpost of Progress’)の二つの短篇が、コンゴでの体験をもとにして書かれたものである。後者は、文明という大きな傘の下に庇護された日常的な世界から、アフリカという非日常的な原始の世界にほうり出された無能な二人の男が、精神的に蝕まれていく過程を描いたものであり、「闇の奥」の中に登場するクルツ(Kurtz)という男の人間性の荒廃についても、似たようなことが言えないこともないが、彼は「進歩の前哨点」に登場する二人の男たちとは異なり、非常に「有能な」「強引な」という意味合いが当然含まれているのだが) ビジネスマンである。

「闇の奥」を読んでいて気になる点は二つある。一つは、この作品の語り手であるマーロウ(Marlow)がクルツのことについて述べていることは、かなりの部分(特に荒野即ち密林とクルツとの関係)がマーロウ自身の推理想像したものであり、他の登場人物から得た情報ではないということである。もう一つは、クルツは一度自分の管理下にある会社の奥地支所を離れて、中央支所にボートで戻ろうとしたことがあるが、何故か思い直して途中で引き返していることである。この小論は、この二つの疑問を出発点としており、この短篇の文章の特徴と主題を考えながら疑問の解明に至ることを目標としている。

II 本 論

「闇の奥」の語り手はマーロウだと序論で述べたが、マーロウとは別に、「私」というこの作品の枠組を形成している語り手が存在する。この語り手は、素性も名前も読者には知らされていないので、いかなる人物であるかは読者の想像に任されている。作者コンラッドの意識が、同じ場面に同居している「私」とマーロウの二人の語り手の中に、いわば二層に跨がって存在していると言える。作品の中に語り手を登場させるということは、作者にとって自分と題材の間に一つのフィルターを置くことであり、題材との距離が保てるという利点があるが、更にその聞き手の中の一人を、作品の枠組となる語り手として介在させるということは、作者と題材との間に二つのフィルターを置くことになり、そのため読者は、この二つのフィルターを通して複雑化され曖昧化された題材を理解するために、かなりの想像力を要求されることになる。逆に言えば、このようにして読者の想像力の入り込む余地を残したというところに、作者の意図があったのではないだろうか。そしてこの「私」がマーロウの体験談を紹介する形を取っているのだが、その場面は帆走遊覧船の甲板の上であり、マーロウの話の聞き手は、「私」の他に「重役」と「弁護士」と「会計士」の合計四人である。少なくとも「私」を除いた三人の男達は、文明社会の支配階級を代表しており、慣習的倫理感というものを象徴している。彼らはテムズ河を下りたいのだが、潮の流れが変わるのを待っていて、その間の徒然を持って余している時に、マーロウが自分の体験談を話し始めるのである。同じ短篇集に収録され、その短篇集の題名にも使われている「青春」という短篇において、初めてマーロウという語り手が登場するが、枠組を形成している語り手の存在、場面、聞き手の数とその身分などす

べて「闇の奥」における状況設定と似通っている。一つだけ異なっているのは、「青春」では語り手のマーロウも四人の聞き手も酒を飲んでいるという点だけで、話の途中で時々マーロウが、Pass the bottle と叫んでいる。「青春」には、青春時代の思い出を懐かしみ、青春を讃えるというテーマが流れている、ということを考慮すれば、酒盛りが始まっても不自然ではない。それに対して「闇の奥」のマーロウは、話の途中で一度 “…Here, give me some tobacco.”³⁾ と聞き手の誰かにパイプタバコを要求しているが、これは彼の話の中に登場する、クルツに心酔しているロシア人（ロシア人を登場させているのは、作者の皮肉が入っていると思われる）の若者が、マーロウに初めて会った時と別れる時に、船乗りとタバコとは切っても切れない関係にあること、又イギリスのタバコはすばらしいと言っていることと呼応している。コンラッドの気持の中では、マーロウの語っている話には、過去を謳歌するための酒よりも、過去を再考し吟味するためのタバコのほうが相応しかったのであろう。

酒宴とは程遠い陰鬱な雰囲気醸し出されている「闇の奥」のマーロウが、自分の体験談を語り始めた時に、作者コンラッドは「私」の口を借りて、マーロウは典型的な船乗りではなく、彼の語る話は他の船乗り達の話ほど単純なものではなく、その話の意味も想像力を働かせて聞いていなければ理解できない、と述べている。

…and to him the meaning of an episode was not inside like a kernel but outside, enveloping the tale which brought it out only as a glow brings out a haze, in the likeness of one of these misty halos that sometimes are made visible by the spectral illumination of moonshine.⁴⁾

コンラッドは、マーロウという人物及び彼の考え方の特異性を読者に印象づけ、難解な比喻を用いて、マーロウの語る体験談の意味が理解できるかどうか、読者に挑戦状を突き付けているのではないと思われる。言い換えれば、読者が慣習的倫理感の枠から飛び出して、どの程度想像力の世界に飛び込んでいけるのかが試されているわけである。又「私」が、甲板の上でマーロウの座って取っている姿勢を仏陀の姿勢に譬えているのは、マーロウがこれから語るのは、彼の体験談と言うよりむしろ、その体験を通じて彼が自ら悟った何か人間の心の中に隠された神秘的な謎についての話であるという、「私」の予感ひいては作者コンラッドの意図を表している。

コンゴ河に魅せられた、まだ若きマーロウは、ヨーロッパ大陸に住んでいて相当なコネを持つ世話好きな叔母の助けを借りて、やっとのことでコンゴ河で交易を営んでいる会社の河船の船長の職を得るが、これは前任の船長であるフレスレーヴェンという男が原住民との諍いがもとで命を落とし、船長のポストが空席になったということもマーロウには幸いしたのである。マーロウはその後何か月も経過したあとで、フレスレーヴェンの遺骨を回収しようとした時に、この諍いの原因が二羽の黒いめんどりについての誤解というほんの些細なことであったこと、又この前任者が非常に穏やかな男であったということを知られるが、別に驚きはしな

かったと述べている。マーロウは、川船の船長の職を得てから数カ月間の間に体験したことによって、慣習的倫理感の束縛から解放されている。

“...Fresleven—that was the fellow’s name, a Dane—thought himself wronged somehow in the bargain, so he went ashore and started to hammer the chief of the village with a stick. Oh, it didn’t surprise me in the least to hear this, and at the same time to be told that Fresleven was the gentlest, quietest creature that ever walked on two legs. No doubt he was ; but he had been a couple of years already out there engaged in the noble cause, you know, and he probably felt the need at last of asserting his self-respect in some way. Therefore he whacked the old nigger mercilessly, while a big crowd of his people watched him, thunderstruck, till some man—I was told the chief’s son—in desperation at hearing the old chap yell, made a tentative jab with a spear at the white man—and of course it went quite easy between the shoulder blades...”¹⁵⁾

この事件は、マーロウのコンゴ行が実現した一つの要因であるとともに、クルツの運命を暗示する伏線にもなっているので見逃すことはできない。帝国政策の下、アフリカで黒人達を支配する立場にある白人達は、アフリカの荒野即ち密林やその住人達と接する時、ヨーロッパ文明の世界でこれまで慣れ親しんできた慣習的倫理感から離れて、自分の想像力で作り上げた理想像〔コンラッドの言葉では理念 (idea)〕を心の中に持ち続けなければ、結局は彼らとの関係を保っていくのは不可能なのだが、フレスレーヴェンは余りにも潔癖すぎたために、その理想像の重さに耐え兼ね、心の中で押さえ付けていた慣習的倫理感が頭を擡げ、おもわず村の長に暴力を振るってしまったのだと思われる。そして父親の悲鳴に耐え兼ねた村の長の息子が無造作に突き出した槍によって、いとも簡単に、原始の姿を留めた厳しい密林の世界から、その存在を消されてしまう。

「闇の奥」の文章の特徴については、コンラッドはまず、「暗黒」、「暗闇」、「死」、「謎」といったことに関連した意味を伝える単語とか、「口に出せない」(unspeakable)といったような、故意にその後に続く名詞の実体を隠蔽するような意味を示す形容詞を多用することによって、この作品の雰囲気即ち陰鬱で重苦しく、不気味で謎めいた雰囲気を漂わすことに努めている。次に、その雰囲気を更に固定させ、題材の現実感を増幅させ、作品を奥行きのあるものにするために、擬人法、不気味な表現、謎めいた難解な表現といった技巧を凝らしている。

擬人法は、荒野即ち密林を表現する時に頻繁に使われている。

“...It was the stillness of an implacable force brooding over an inscrutable intention...”¹⁶⁾

これは語り手マーロウが、やっと河船の船長として、コンゴ河を老朽化した蒸気船で溯っている時に、河の両側に巨大な壁のように立ち塞がっている密林の神秘的な静けさを述べたもの

で、非常に短い文ではあるが、コンラッドの小説の文章の特徴を的確に示した典型的なものだと思う。密林がまるで生ある巨人であるかのように述べている。人間も自然の一部にすぎないというコンラッドの芸術性⁷⁾から考えても、自然である密林に対して擬人法を用いるのは、至極当然のことであると言えるが、この作品の中に登場する密林という巨人は、文明を拒否し、文明に毒された人間達の原始性及び想像力を呼び覚まして、破滅させようという厳然たる意志を持っているのではないかと、読者に思わせ、読者の恐怖心をかき立てている。マーロウの乗った蒸気船は老朽化しているため、かなり苦勞しながらコンゴ河を溯って、病んでいるというクルツが支所長を務めている会社の奥地支所の近くまで来た時、突然クルツを神のように崇めている原住民達の襲撃を受け、操舵手をやらせていた黒人を始めとして、現地で雇った何人かの乗組員を失う。この襲撃はクルツの指令によるものであるが、マーロウが機転をきかせて、蒸気船に装備されている警笛を鳴らし、やっとその場を切り抜けて、奥地支所に到着する。そこで彼は、サーカスの一座から抜け出してきた道化のように、色とりどりのつぎはぎだらけの服を着たロシア人の青年に会う。船上で、クルツを偶像として崇拝しているこの青年から、クルツのことについていろいろ聞きながら、マーロウは双眼鏡を目にあてて支所の建物のほうを見る。支所の周囲には張り巡らされた塀らしきものがあり、それには、今やもう横に渡した添え木はなくなり、縦に突き刺された杭のみが残され、そのてっぺんには、なにやら細工をされた丸い象牙が乗せられているのを見て、マーロウは奇妙な感じに撃たれる。何となく気になって再びそちらに双眼鏡を向けたマーロウは、その丸いボール状のものが、細工を施した象牙ではなく、人間の頭蓋骨であることに気が付いて驚く。しかし、ここにたどり着くまでに、目にした白人達の様々な愚行・奇行に慣らされて、不気味なことに對して感覚の鈍磨してしまっているマーロウは、それほど大きな驚きを表すことなく、クルツと密林の関係について、あまりにも冷静過ぎるのではないかと思われるような明快な判断を下す。マーロウは、慣習的倫理感の世界から飛び出して、想像力の世界に入り込んでしまっている。

“...They only showed that Mr. Kurtz lacked restraint in the gratification of his various lusts, that there was something wanting in him—some small matter which, when the pressing need arose, could not be found under his magnificent eloquence. Whether he knew of this deficiency himself I can't say. I think the knowledge came to him at last—only at the very last. But the wilderness had found him out early, and had taken on him a terrible vengeance for the fantastic invasion. I think it had whispered to him things about himself which he did not know, things of which he had no conception till he took counsel with this great solitude—and the whisper had proved irresistibly fascinating. It echoed loudly within him because he was hollow at the core...”⁷⁸⁾

マーロウの判断が正しいかどうかは、読者の想像力に委ねられているわけだが、杭の上に乗せられている頭蓋骨を頭に浮かべた読者の受けた衝撃の大きさに比べて、実際にそれを目撃し

たマーロウの受けた衝撃の軽さは、意外に現実感を伴って読者を納得させ、彼の判断に異議を挟もうという気持にはなれない。彼の判断が正しいかどうかは、読者にとってはもはや問題ではなく、読者は彼の卓越した想像力の虜になってしまうことに、ほとんど抵抗できなくなってしまっている。ただクルツの内実が「虚ろ」(hollow)だったので、彼は原始の姿を留めた密林の甘い囁きに抵抗できなかったという点については、「虚ろ」という言葉の意味が曖昧なために、マーロウの想像力の飛躍に驚かせられるが、「人間性にどこか欠けている」ということを意味しているのならば問題はない。

多用されている単語の醸し出す不気味さに加えて、不気味な表現・描写も多いが、自然よりも人間が対象にされている。マーロウは、河船の船長として雇われる前に、ヨーロッパ大陸に渡って、コンゴ河で交易を営んでいる会社の本社を面接のため訪れるのだが、その本社の受付を務めている二人の黒い毛糸で編み物をしている女達や、コンゴに出掛けて行く人間達の頭の寸法を測っている医者の不気味さは、これからマーロウが出掛けようとしているコンゴへの旅が、容易なものではなく、彼の人間としての全能力を要求するような辛いものになるということの前触れとなっている。そしてマーロウがコンゴ河口に近い会社の出張所にやって来た時に会った主任会計士は、暑さの厳しい密林の中で、極端に清潔できちんとした服装を守れることを習慣としており、同じ部屋の中で瀕死の病人が苦しそうなうめき声をあげていても、平気で帳簿をつける仕事ができるという男である。こういう不気味な人間達が登場しているが、その中でも最も不気味で、人間らしさの薄い、まるで文明によって産み出された機械のような怪物ではないのかと思われるのは、コンゴの中央支所の支所長であろう。

“...He originated nothing, he could keep the routine going—that’s all. But he was great. He was great by this little thing that it was impossible to tell what could control such a man. He never gave that secret away. Perhaps there was nothing within him. Such a suspicion made one pause—for out there there were no external checks. Once when various tropical diseases had laid low almost every ‘agent’ in the station, he was heard to say, ‘Men who come out here should have no entrails.’ He sealed the utterance with that smile of his, as though it had been a door opening into a darkness he had in his keeping. You fancied you had seen things—but the seal was on...”⁹⁾

この支所長は、毎日の決まり切った仕事を継続させていくだけで、想像力というものを持たない無能な男であるが、他の人間に較べて異常に頑健な肉体を所有しているという、そのたった一つの理由だけで、この地位まで昇格してきたのである。これらの不気味な登場人物達に共通している特性は、機械のような無表情・冷たさであり、彼らには人間らしい（現在の文明に毒された人間を頭に思い浮かべると、「人間らしい」という言葉が適当かどうか疑問であり、理想に基づいた願いを込めて、この言葉を使っているのであるが）優しさ、暖かさ、ひいては人間的な弱さが全く感じられない。作者は、「支所長には内実というものがある」という

言い方と、「クルツは虚ろである」という言い方を、対照的に使っていると思われる。一見、支所長とクルツは同じカテゴリーに入る人間であると、マーロウが述べているように思われるが、「クルツは虚ろである」というのは、「クルツには人間性に欠けたところがある」という意味であり、「支所長には内実というものが全く無い」というのは、「支所長には人間性というものが全く見当たらない」という意味で、この二人は似ても似つかぬ、全く別々のカテゴリーに入れられるべき人間である。中央支所長に代表される、不気味な人間達には、人間として最も根本的な魂というものが無く、人間の姿をした化け物のような存在だと言える。マーロウが、原住民達を支配している残虐な専制君主ともいうべきクルツという人間に魅かれたのは、まさにクルツの心の中に、不気味な人間達には無い魂即ち人間性の存在を感じ取ったからに外ならない。又不気味な表現・描写の一つとして、不気味なユーモアも挙げておかなければならないだろう。コンゴ河を溯っている時、現地で船乗りとして雇った人食い人種の黒人達は、僅かな食料しか携帯しておらず、飢えているようだが、自分たちを襲って来ようとはしないので、マーロウは不思議に思うが、同時に彼らにもなにか抑制力のようなものが働いているのだと感じる。

“...I looked at them with a swift quickening of interest— not because it occurred to me I might be eaten by them before very long, though I own to you that just then I perceived—in a new light, as it were—how unwholesome the pilgrims looked, and I hoped, yes, I positively hoped, that my aspect was not so—what shall I say?—so—unappetising : ...”¹⁰⁾

マーロウは、人食い人種の男達に食べられても不思議ではない状況に置かれているのであるが、読者は「不味そうな」(unappetising)という彼の言葉におもわず笑いを漏らしてしまいそうになる。又ヨーロッパ文明を代表しているようなクルツに欠けている抑制力というものを、原始の姿を残している密林の中で生活している人食い人種の男達に見いだすというのは、何と皮肉なことなのだろうか。啓蒙の必要があるのは、アフリカの原住民達ではなく、ヨーロッパからやって来ている白人達の方である、と思わざるをえない。

コンラッドはこの作品の中で、as if (as though) ～とか、like～のような直喩をしばしばマーロウに用いさせているが、そのためマーロウの言っていることがわかり易くなるどころか、かえって謎めいた難解な表現になってしまう傾向がある。クルツを自分の船に運ばせ、クルツという邪神の最後の使徒とも言うべきロシア人の青年と別れを告げた日の真夜中、マーロウが目覚ましてクルツがいないのに気付く咄然とする。

“...I think I would have raised an outcry if I had believed my eyes. But I didn't believe them at first—the thing seemed so impossible. The fact is, I was completely unnerved by a sheer blank fright, pure abstract terror, unconnected with any distinct shape of physical danger. What made

this emotion so overpowering was—how shall I define it?—the moral shock I received, as if something altogether monstrous, intolerable to thought and odious to the soul, had been thrust upon me unexpectedly....”¹¹⁾

瀕死の重病人であるクルツがベッドに居ないのを発見した時、自分の眼が信じられなかったと言っているのは、今やマーロウの気持ちの中では、クルツの存在が自分の存在と一つに重なり合ってしまったので、クルツの存在を失うと自分自身の存在までが脅かされるような気がしたのだと思われる。そしてクルツが ‘The horror! The horror!’¹²⁾という叫びを残して死んでいったあと、マーロウは自分という人間と比較しながら、クルツという人間に対する最終的評価を述べる。

“...He had summed up—he had judged. ‘The horror!’ He was a remarkable man. After all, this was the expression of some sort of belief; it had candour, it had conviction, it had a vibrating note of revolt in its whisper, it had the appalling face of a glimpsed truth—the strange commingling of desire and hate. And it is not my own extremity I remember best—a vision of greyness without form filled with physical pain, and a careless contempt for the evanescence of all things—even of this pain itself. No! It is his extremity that I seem to have lived through. True, he had made that last stride, he had stepped over the edge, while I had been permitted to draw back my hesitating foot. And perhaps in this is the whole difference; perhaps all the wisdom, and all truth, and all sincerity, are just compressed into that inappreciable moment of time in which we step over the threshold of the invisible....”¹³⁾

マーロウは、クルツの管轄下にある奥地支所の建物の周囲の杭の上に、象徴的に置かれている頭蓋骨を見た時、クルツが最終的には自分の人間性に欠けたところがあることに気が付いた、という判断を下しているが、自分の存在と一つに重なったようなクルツの存在を失って、その欠落感を埋めるかのように、彼の心にはクルツという人間を称賛する気持ちだけが大きな存在を占めている。マーロウにとって重要なことは、想像力の世界での最後の一步を踏み出すことのできなかった自分のことではなく、それを現実に実行にうつしたクルツの決断力である。

III 結 論

クルツは、ヨーロッパを象徴するビジネスマンではあるが、絵も描き、詩も作り、作曲もできるといふ想像力豊かな芸術家でもある。こういう繊細な感覚を持った人間は、原住民の槍で突き殺されたフレスレーヴェンという船長もそうであったと思われるが、自分の想像力によって作り上げた一つの理想像に忠実であろうとして、自分がこれまで育ってきた環境の慣習的倫理感を極度に押さえ付けるあまり、一旦その理想像が実現できないとなると、押さえ付け

ていた慣習的倫理感が噴き出して、理想像とは反対の残虐性に支配されることになる。語り手のマーロウは、「闇の奥」の主題である「原始の姿を留めた密林とクルツという密林の邪神とも言うべき人間によって触発された想像力」を駆使して、クルツの中に人間性の荒廃を体感するが、マーロウは、不気味な人間たちに象徴されている「慣習的倫理感に縛られた墮落」よりも、クルツという人間に象徴されている「想像力によって作り上げられた理想像がもたらした悪夢」のほうを選択する。この作品の最後の場面でマーロウはクルツの許婚に会って、彼女の人間性に促されるまま、期待に応じて自分の嫌悪している嘘をついてしまうが、これも彼が悪夢を選択したことの延長線上に位置する行為であり、人間性を重視する彼にとっては自分の気持ちに正直な行為だと言える。又クルツが中央支所に帰る途中で、急に思い直して奥地支所に引き返してしまったのも、悪夢を選択してしまった責任を意識した、彼の自分の気持ちに正直な自殺行為だったのではないだろうか。

密林とクルツとの関係は、ヨーロッパ社会の慣習的倫理感では決して伺い知れるものではなく、そこから抜け出した語り手マーロウの想像力によってのみ語られうるものであると思われる。

コンラッドは、小説の「形式」と「内容」に大いに拘り、マーロウという語り手の存在を始めとして、「内容」に相応しい「形式」を追求し続けた作家である。この作品に描かれていて、侵入してくる人間達を容赦なく排除する意志を持った荒野即ち密林は、作家コンラッドにとっては、外国語である英語を駆使して自分の言葉を積み重ねる小説の世界即ち「闇」を意味しており、彼はその「闇」の中を、想像力即ち「闇の奥」を求めてさ迷い歩き続けた、言葉の巡礼者であったと言える。

Notes

- 1) 渡辺淳一著 「創作の現場から」 集英社 1994 p.93

「一般に短編を書ける作家は、特別の場合を除いて長編も書けるものです。が、長編作家はほとんどといっていいほど短編を書けない。つまり、作家の場合には、短は長を兼ねるけれど、長は短を兼ねないといってもいいような気がします。」と渡辺氏は述べている。

- 2) 藤原洋樹著 「統考・想像力と倫理感—「帰宅」の一研究—」の序論参照。『倉敷芸術科学大学紀要 第2号』p, 295
- 3) *Heart of Darkness—Joseph Conrad* ed. by Ross C Murfin, second edition, (Bedford Books of St. Martin's Press, 1996) p.63
- 4) *ibid.*, p.20
- 5) *ibid.*, p.23
- 6) *ibid.*, p.49
- 7) Edward Garnett, 'Unsigned Article', *Joseph Conrad: Critical Assessments* vol.II, ed. by Keith Carabine, (East Sussex: Helm Information Ltd, 1992) p.274
- 8) *Heart of Darkness—Joseph Conrad*, op. cit., p.74
- 9) *ibid.*, p.37
- 10) *ibid.*, p.57
- 11) *ibid.*, p.81

12) *ibid.*, p. 86

13) *ibid.*, pp. 87~88

On Imagination and Ethics : Part III — A Study of ‘Heart of Darkness’ —

Hiroki FUJIWARA

Faculty of College of Liberal Arts and Science,

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712, Japan

(Received September 30, 1997)

I think Joseph Conrad's ‘Heart of Darkness’ is one of his best works written with his utmost techniques of the tale. It describes the eerie experiences of Marlow, narrator, in Congo, Africa and his imaginative reactions. I was attracted by two mysteries in the tale. One is that Marlow imagined the relation between Kurtz and the wilderness with little information from other characters. And the other is that Kurtz changed his mind and returned to the inner station on his way to the central station.

In this survey, I want to inquire into the reasons of the two mysteries by picking up the characteristics of the style and the theme of ‘Heart of Darkness’.